



摩天楼

詩人 アーサー・ビナード

英語が漢字に置き換えられて作られた日本語が、ごまんとある。pitcherは「投手」になってcatcherも「捕手」と決まり、最近ではvirtual realityが「仮想現実」といわれたりもする。数々のそんな訳語の中でも、ぼくがとりわけ気に入っているのはskyscraperの日本語版「摩天楼」だ。

skrapeは「擦る」とも「磨く」ともとれるし、「擦り剥く」という意味にもなるが、少々やわらかめの「摩る」を選んだセンスが光る。しかもその「摩」が、「摩訶不思議」にも「摩利支天」にも通じて、古典の風格を備えている。「楼」がまたそこを補い、とても訳語には見えず、「大仏」や「五重塔」と同じくらい古い名称にも思える。発音は濁音がなく、でもどこか凄みがあり、大きく響くようにできている。ニューヨークに生まれた詩人Rachel Fieldは、かつて街のskyscrapersを見上げて作品を書いた。

原題はそのままSkyscrapersだが、「摩天楼」と訳すと、よけい広がる感じがする。

摩天楼

レイチェル・フィールド

摩天楼たちは疲れないかしら？ いつまでも

あんなにしゃんと背をのばしていなきゃならないなんて。

ぶるぶる震えたりはしないのかしら？ 冷え込んだ夜

帽子もかぶらないで、寒空に頭がそのままふれている。

たまにさびしくなるかしら？

あまりにも高くそびえ立っているから。

ゆっくり横になりたいと思うのかしら？

二度と起きないで、そのままでもいいって。

東京の汐留に林立する超高層ビルが目に入ると、ぼくはフィールドの「疲れないかしら？」を思い出す。新しい建築物ばかりなのに、なんだか疲労困憊の雰囲気（えいばい）がただよって、「ゆっくり横になりたい」印象を受ける。ただ、超高層ビルの二つの特徴は、一度つくってしまったら壊せない点だ。解体するには膨大な費用がかかり、二百年ももつといわれている。壊された唯の例外は、二〇〇二年九月十一日、ニューヨークの惨事か。



アーサー・ビナード

詩人。1967年米国ミシガン州生まれ。2001年に詩集『釣り上げて』（思潮社）で中原中也賞、2005年に『日本語ぼこりぼこり』（小学館）で講談社エッセイ賞、2007年には『ここが家だ——ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）で日本絵本賞を受賞。近著に、詩集『ゴミの日』（理論社）など多数。